

令和 元年 6 月 17 日現在

機関番号：15201

研究種目：基盤研究(C) (一般)

研究期間：2015～2018

課題番号：15K11891

研究課題名(和文) 在日外国人の子どもたちを取り巻く環境とメンタルヘルス

研究課題名(英文) The present condition of mental health of Vietnamese children in Japan

研究代表者

瀧尻 明子 (Takijiri, Haruko)

島根大学・学術研究院医学・看護学系・講師

研究者番号：70382249

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 2,200,000円

研究成果の概要(和文)：両親のどちらかまたは両方がベトナム出身者の小学4年生から中学3年生の子どもを対象として、30～60分の構造的面接を行なった。

9割は日本生まれであり、自分する国籍は日本が12人、ベトナムが18人であった。父親が不在の子どもが4割と高率であった。母親との会話で母親が話すことについて、よく理解できない子どもの自己価値は有意に低く、自分の言いたいことが母親にあまり伝わっていないと感じている子どもはそうでない子どもと比べて抑うつ得点、不安ストレス得点が高く、コンピテンスは低かった。母親との関係が深く、それがメンタルヘルスに大きく影響していることが示唆された。

研究成果の学術的意義や社会的意義

在日ベトナム人の子どもは先行研究の日本の子どもよりも不安ストレス、抑うつ得点が若干高いが、同時にコンピテンス得点も学習、社会、自己価値ともに高かった。しかし、親がベトナム人である子どもは不安ストレスを強く感じており、家庭内での母親とのコミュニケーションギャップがメンタルヘルスに大きな影響を及ぼしていることが示唆された。

2019年の入管法改正により、今後日本で長く生活する外国人はますます増えることが見込まれる。それに伴い日本で生まれ育つ子どもも増える。将来の我が国を支えるそうした子ども達が健やかに育まれるための支援の在り方を検討するための一資料となる結果を得られたと考える。

研究成果の概要(英文)：A structured interview of 30 to 60 minutes was conducted for children from fourth grader to junior high school student whose parents are from Vietnam.

Ninety percent were born in Japan, with recognized oneself 12 nationalities of Japan and 18 of Vietnam. The percentage of children without a father was high, at 40%. Children who did not understand well about their mother's speech in conversation with her mother had significantly lower self-worth and children who feel that they do not know much about what they say are more depressed than children who do not. The anxiety stress score was high and the competence was low. The relationship with the mother was deep, and it was suggested that it had a great influence on mental health.

研究分野：精神看護学

キーワード：在日外国人 ベトナム 子ども 二世三世 メンタルヘルス

1. 研究開始当初の背景

日本で中長期的に生活する外国人の数は、様々な外国人施策により、この20年でほぼ倍増している。その内訳は、戦前より日本に居住していたオールドカマーと、1970年代以降に来日したニューカマーの数が逆転しており、定住志向が進んでいる。ニューカマーの生活は言語・文化の違い、脆弱な経済基盤、家族離散・別離、偏見や支援の不足などから困難となりやすい。とりわけ家庭と社会の異なる文化の狭間で育つ子どもたちにとっては過酷であると思われる。しかし外国にルーツを持つ子どもたちのメンタルヘルスを評価することに焦点を当てた研究は国内でほとんど行われていない。

2. 研究の目的

在日外国人、特にベトナム人の子どもたちのメンタルヘルスとその影響因子を明らかにすることを目的として本研究を行った。

3. 研究の方法

両親のどちらかまたは両方がベトナム出身である、小学4年生以上と中学生の子どものうち、週末にボランティア主催の学習支援教室やNGOの母語教室に通っている子どもを対象に、家庭環境やコミュニケーションの状況を問う自作の調査票とバールソン抑うつ尺度(DSRS-C)、不安ストレス調査票、児童用コンピテンス尺度から成る質問紙を用いて、調査票については個別に構造的面接調査を行い、3つの尺度については研究者立ち合いの自記式調査とした。

4. 研究成果

30名の子どもへの調査を実施した。基本的属性は表1に示した。

対象者数は、小学生24名、中学生6名の計30名、男子が10名、女子が20名であった。9割の子どもが日本生まれで、ベトナム生まれの3名も来日後、3年以上経過しており、日常生活上の言葉で不自由を感じる子どもはいなかった。

国籍については、全ての子どもに「自分が何人だと思えますか?」「お父さん、お母さんは何人だと思えますか」と尋ねた。両親のどちらかが日本人である場合は自分も日本人であると答えていたが、両親ともにベトナム人であっても自分は日本人であると回答した子どもも2名いた。

家族構成については、父親と同居していない子どもが12名(40%)と多かった。父親が不在の理由は、離婚、出稼ぎであった。祖父母との同居は1名のみ、同胞は本人も含めて平均2.8人(1~7人)であった。

コミュニケーションの状況について、ベトナム語での会話が週2~3回以上と高い頻度の子どもは19名(69.3%)、週1回程度以下とあまり話さない子どもは11名(36.7%)であった。ベトナム語で話す相手は母親が最も多かった。

親とのコミュニケーションについて、相手が父親の場合は、「主に日本語で会話する」という子どもが14名(53.8%)と半数以上となり、ベトナム語を使う子どもは2名のみであった。一方、母親とのコミュニケーションでは日越半々が12名(40%)、ベトナム語が6名(20%)と、ベトナム語の割合が高かった。

親子間の言語的理解の状況について、4分の1の子どもは両親が話していること全てを理解することができないと回答した。

また、自分が言いたいことがすべて伝わっているかどうかについて、母親に対しては12名(40%)が全ては伝わっていないと考えていた(表2)。

3つの自記式評価尺度の得点については表3に示した。学習コンピテンスは日本の子どもに対して行われた先行研究よりもむしろ高い傾向であった。社会、自己価値のコンピテンスは日本の子ども

表1 基本的属性

学年	人数(%)
小学4年生	10 (33.3)
5年生	5 (16.7)
6年生	9 (30.0)
中学1年生	2 (6.7)
2年生	1 (3.3)
3年生	3 (10.0)
性別	
男子	10 (40.0)
女子	20 (60.0)
出生地	
日本	27 (90.0)
ベトナム	3 (10.0)
自認する国籍	人数(%)
日本	12 (40.0)
ベトナム	18 (60.0)
両親の国籍(子どもの認識)	
日本	10 (33.3)
父ベトナム	18 (60.0)
親その他	1 (3.3)
分からない	1 (3.3)
母日本	4 (13.3)
親ベトナム	24 (80.0)
分からない	2 (6.7)

表2. 両親とのコミュニケーション

親との会話で使用する言語	対父親 (n=26)	対母親 (n=30)
	人数(%)	人数(%)
主に日本語	14 (53.8)	12 (40.0)
半々	10 (38.5)	12 (40.0)

表3. 全体の自記式評価尺度得点

	コンピテンス尺度			不安ストレス調査票	DSRS-C	DSRS-C 16≦
	学習	社会	自己価値			
平均点(SD)	29.1 (6.2)	28.0 (5.7)	26.2 (7.7)	16.3 (8.1)	11.8 (4.5)	16.7%
参考値(先行研究)	24.3 (6.3) (櫻井,1983)	27.3 (5.8) (櫻井,1983)	24.4 (6.3) (櫻井,1983)	12.8 (2.1) (松川,1999)	9.0 (5.8) (傳田,2004)	13.0% (傳田,2004)

もたちと同様の得点であった。不安ストレスや、DSRS-Cの得点は、日本人の子どもに対して行われた先行研究の結果よりも高く、DSRS-Cのカットオフ値(16点)を示した子どもの割合は16.7%と、諸外国の報告と比べて高い結果となっている日本の子どもの割合13.0%よりも、さらに高かった。16点以上となった子どもは7名で、そのうち6名が女子、5名が小学生であった。6名がベトナム国籍であると自認しており、7名とも母親がベトナム籍、5名は父親もベトナム籍、1名はカンボジア籍であり、日本国籍だと自認している子どもは1名だけであった。また、3名は父親不在の子どもであった。

次に、属性ごとの自記式評価尺度の結果を示した(表4)。男女間ではどの尺度も大きな差は

なかった。女子の方が学習コンピテンス若干高く、逆に自己価値は低くなっていた。またDSRS-C得点や不安ストレス得点は女子の方が高い傾向があった。小学生と中学生を比べると、人数の差はあるものの、中学生のほうが学習コンピテンスは有意に低く、抑うつや不安ストレスは高かった。

自認する国籍によっては有意な差は認められなかったが、自分をベトナム籍だと思っている子どものほうがストレス、抑うつ得点が高い傾向があった。

ベトナム語での会話の頻度

については、よく話す子どものほうが社会コンピテンスが有意に低かった。学習コンピテンス、自己価値コンピテンスもよく話す子どものほうが低い傾向にあり、逆に不安ストレスや抑うつ得点は高かった。

表5の通り、親の国籍別では、3つのコンピテンスには差がないが、両親ともベトナム国籍だと考えている子どもの不安ストレスの得点が高く、特に母親がベトナム籍と認識する子どもについては有意な差を示した。またDSRS-C得点も高い傾向があった。

父親が同居していないことでの差はなかったが、学習コンピテンスについては、同居している子どものほうが高い傾向にあった。

最後に親とのコミュニケーション状況と自己評価式尺度の得点の関連

を示す(表6)。父親とのコミュニケーションは、同居していないが時々会うという場合も含めた回答とした。半数以上の子どもが父親とは日本語で会話していた。父親とのコミュニケーションが日本語とベトナム語半々の子どもは、主に使用する優勢言語がどちらかに決まっている子どもに比べて自己価値は低かった。父親が話していることをすべて理解できると答えた子どもは、学習、自己価値のコンピテンスが高い傾向にあり、不安ストレスは、すべては理解できないとする子どもに比べて有意に低く、抑うつ得点も低くなっていた。また、自分が言いたいことが父親にすべて伝わっているかどうかで比較すると、有意な差はないものの、伝わっていると感じている子どものほうが自己価値コンピテンスが高かった。不安ストレスや抑うつ得点に差はなかった。

母親とのコミュニケーションにおいて、主に日本語を使う子どもは、学習、自己価値のコンピテンスが共に高く、不安ストレスや抑うつが低かった。また、父親とのコミュニケーションと同様に、日本語とベトナム語半々の子どもは、主に使用する言語がどちらかに決まっている子どもに比べて自己価値は低かった。母親が話すことが全て理解できると答えた子どもは、そうでない子どもに比べて自己価値が有意に高く、不安ストレスや抑うつは低い傾向にあった。自分の言いたいことが全て伝わっていると感じている子どもは、学習、社会、自己価値全てのコンピテンスが有意に高く、抑うつ得点は有意に低くなっていた。

以上の結果より、ベトナム人の子どもも各国の先行研究と同様に女子のほうが抑うつ得点や不安ストレス得点が高めであった。小学生よりも中学生のほうが学習コンピテンスが有意に低いのは、学習言語と生活言語の乖離によりついていけなくなる10歳の壁を象徴した結果と言える。しかし、本人がベトナム人であるというだけでメンタルヘルス上の困難さは示されなかった。自身よりも親の国籍や親とコミュニケーションをとる際の優勢言語があるかどうか、両親との、特に母親との話していることの「分からなさ」「伝わらなさ」によって不安ストレスや抑

表4.基本的属性と自記式評価尺度得点

属性(人数)	得点(SD)	コンピテンス尺度			不安ストレス調査票	DSRS-C
		学習	社会	自己価値		
性別 n=30	男子(10)	27.6(7.3)	29.2(4.4)	27.7(8.2)	15.0(7.4)	11.1(3.3)
	女子(20)	29.9(5.7)	27.5(6.5)	25.4(7.8)	17.0(8.8)	12.2(5.1)
校種別 n=30	小学生(24)	30.4(6.2)	27.3(5.9)	26.5(8.0)	15.8(8.6)	11.6(4.8)
	中学生(6)	24.0(3.7)	30.8(5.0)	24.7(7.5)	18.7(7.3)	12.6(3.6)
自認する国籍 n=30	日本(12)	28.9(6.3)	27.7(5.2)	25.4(6.6)	15.0(8.8)	11.0(3.7)
	ベトナム(18)	29.2(6.4)	28.3(6.4)	26.8(8.8)	17.3(8.0)	12.4(5.1)
越語会話頻度 n=30	よく話す(19)	27.8(6.1)	26.4(5.8)	24.5(8.6)	17.5(8.7)	13.0(4.7)
	話さない(11)	31.3(6.3)	30.8(5.1)	29.0(5.7)	14.2(7.4)	9.8(3.6)

表5.親の国籍と自記式評価尺度得点

属性(人数)	得点(SD)	コンピテンス尺度			不安ストレス調査票	DSRS-C
		学習	社会	自己価値		
父親の国籍 n=30	日本(12)	29.6(7.0)	28.5(5.2)	26.4(7.0)	12.9(7.8)	10.5(4.0)
	ベトナム(18)	29.8(5.8)	27.8(6.7)	26.7(8.2)	18.8(7.3)	12.8(4.7)
母親の国籍 n=27	日本(4)	30.0(3.7)	28.3(2.2)	26.0(3.8)	8.5(3.3)	9.5(2.7)
	ベトナム(23)	29.7(6.5)	28.0(6.6)	26.7(8.1)	18.0(7.6)	12.4(4.7)
父親との同居 n=30	同居(18)	30.7(6.2)	27.8(6.1)	26.1(8.3)	16.1(8.9)	11.4(5.1)
	不在(12)	26.8(5.9)	28.3(5.7)	25.4(7.5)	16.6(7.6)	12.4(3.7)

様式 C - 19、F - 19 - 1、Z - 19、CK - 19 (共通)

うつが強まり、自身の力や価値を過小評価するようになることが明らかになった。親子間のコミュニケーション乖離を防ぐために、子どもに対しては母語教育、親世代に対しては日本語教育の機会を保障し、相互に理解し合える関係を維持するための支援が不可欠である。

表6. 親とのコミュニケーションと自記式評価尺度得点

コミュニケーションの状況(人数)	自己評価式尺度 得点 (SD)	コンピテンス尺度			不安ストレス 調査票	DSRS-C
		学習	社会	自己価値		
父親とのコミュニケーション	主言語あり あり (16) n=26	30.8 (5.2)	28.6 (4.7)	28.2 (6.4)	15.4 (8.5)	10.6 (3.6)
	半々 (10)	29.2 (6.7)	26.2 (6.6)	23.3 (9.7)	16.1 (8.6)	12.9 (5.9)
母親とのコミュニケーション	主言語 日本語(14) n=16	30.6 (5.5)	29.1 (4.8)	27.9 (6.8)	15.1 (8.4)	10.6 (3.7)
	越語 (2)	31.5 (2.1)	25.0 (1.4)	30.0 (2.8)	18.0 (12.7)	11.0 (4.2)
父親が話すことへの理解度	全て理解できる (19) n=26	31.5 (5.9)	28.3 (5.1)	27.3 (7.6)	13.6 (7.9)	10.6 (4.5)
	全ては理解できない (7)	26.6 (3.6)	26.1 (6.5)	23.7 (9.1)	21.3 (7.6)	14.0 (4.6)
自分の言い分の伝わり具合	全て伝わっている (17) n=26	30.9 (6.6)	28.1 (6.1)	27.5 (7.8)	16.2 (9.0)	11.5 (4.8)
	全ては伝わらない (9)	28.2 (3.4)	26.9 (4.3)	24.1 (8.3)	14.7 (7.6)	11.6 (4.7)
母親が話すことへの理解度	主言語あり あり (18) n=30	29.8 (6.8)	27.9 (6.0)	27.8 (8.0)	16.6 (9.3)	11.1 (4.1)
	半々 (12)	28.1 (5.5)	28.2 (5.8)	23.8 (7.2)	16.0 (6.9)	12.8 (5.0)
母親とのコミュニケーション	主言語 日本語(12) n=18	31.4 (7.1)	28.4 (6.2)	29.2 (7.7)	13.8 (9.2)	9.9 (3.8)
	越語 (6)	26.5 (5.2)	27.0 (6.0)	25.0 (8.5)	21.8 (7.4)	13.5 (4.0)
母親が話すことへの理解度	全て理解できる (24) n=30	29.9 (6.9)	28.6 (6.1)	27.7 (7.8)	15.1 (8.3)	11.6 (4.8)
	全ては理解できない (6)	27.0 (3.7)	26.5 (5.0)	21.9 (6.4)	19.6 (7.7)	12.9 (4.4)
自分の言い分の伝わり具合	全て伝わっている (18) n=30	30.7 (6.2)	30.1 (5.0)	29.4 (5.3)	15.1 (8.8)	10.3 (4.1)
	全ては伝わらない (12)	29.2 (6.4)	26.8 (5.9)	24.9 (5.8)	21.3 (8.7)	18.2 (7.4)

5. 主な発表論文等

〔学会発表〕(計 1件)

第25回多文化間精神医学会 学術総会 2018年

発表者：瀧尻明子，分担研究者：三浦藍，野上恵美，植本雅治，テーマ；「在日ベトナム人の子どものメンタルヘルスの現状」

〔図書〕(計 1件)

『国際化と看護 日本と世界で実践するグローバルな看護をめざして』大橋一友，岩澤和子(編集)，メディカ出版，2018(担当章：第3章「グローバルな看護の実際」3「地域における精神看護」p119-123，単独執筆)

6. 研究組織

(1)研究分担者

研究分担者氏名：植本 雅治

ローマ字氏名：(UEMOTO, Masaharu)

所属研究機関名：神戸市看護大学

部局名：看護学部

職名：名誉教授

研究者番号(8桁)：90176644

研究分担者氏名：三浦 藍

ローマ字氏名：(MIURA, ai)

所属研究機関名：人間環境大学

部局名：看護学部

職名：講師

研究者番号(8桁)：10438252

様式 C - 19、F - 19 - 1、Z - 19、CK - 19 (共通)

研究分担者氏名：野上 恵美

ローマ字氏名：(NOGAMI, emi)

所属研究機関名：神戸大学

部局名：国際文化学研究科

職名：協力研究員

研究者番号(8桁)：90782037

科研費による研究は、研究者の自覚と責任において実施するものです。そのため、研究の実施や研究成果の公表等については、国の要請等に基づくものではなく、その研究成果に関する見解や責任は、研究者個人に帰属されます。